

カナリアの歌「若者たち」

朝日新聞の新春連載「カナリアの歌」は読みごたえがある。岐路にある私たちの社会。かつて炭鉱でいち早く異変を知らせたカナリアのように、危機や転換点に直面する人たちがいます。記者がいま一番伝えたい現場をルポしますと。抜粋して紹介したい

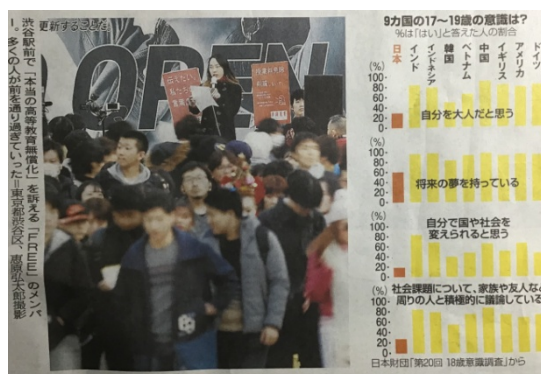
1月5日のルポ 2020 から—「おかしいと声を上げたら応援して下さる方が増え、第一歩を踏み出せた。本当に感謝しています」居並ぶ国会議員の前に立ち、語りかけたのは東京都内の私立高校に通う2年生だった。大学入学共通テストで予定されていた英語民間試験活用の見送りが決まった昨年11月1日、国会の一室で開かれた「英語民間試験の延期を求める会」だ。

この高校生、ケンさんに話を聞くと、最近まで政治ニュースはひとごとだと受け流していたそうだ。「だって政治家批判なんて、してはいけない雰囲気があるじゃないですか」え、どうして？「ふつう、話さないことになっているんです。学校や塾、部活で忙しくて余裕のない人ばかりだし。『決まってることなんだから、やめなよ』『言ってもむだだよ』という人もいる」

ケンさんが変わったのは8月。当時の柴山昌彦文部科学相が、民間試験について「サイレントマジョリティは賛成です」とツイートした時だ。

試験を受けるのはぼくたちなのに、声を受け止めずに決めるのか。怒りを覚えたケンさんは柴山さんに返信し、学校は不安な生徒の阿鼻叫喚であふれていると伝え、「この声は拾ってくれませんか？いつからこの国は都合の悪い他の人の意見に耳を傾けようとしなくなってしまったのでしょうか？」と問いかけた。

ただ、8月以降のケンさんは、日本では「少数派」かもしれない。写真のように、日本財団がこの秋、9カ国の17歳から19歳計9千人を対象に実施した調査によれば、「自分で国や社会を変えられると思う」「社会課題について積極的に議論している」などの質問に「はい」と答えた人の割合は、日本がダントツの最下位だった。



サイレントな人たちと、サイレントマジョリティーを代表していると称する政治。確かに選挙はしているけれど、「民意」を映せているのだろうか。世代によって原体験が異なり、なじんでいるメディアも、触れる情報も違う。経済的、地域的格差も広がる。そんな時代でも、分断を超えてともに声を上げるため、FREE は学生の実態を伝え共感を広げようととりくむ(写真)。分断は、世界の民主主義を揺るがしている。

(2020年1月7日)